



Title	古代語形容詞の活用語尾：動詞活用語尾形態への仮託
Author(s)	竹内, 史郎
Citation	語文. 2002, 78, p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古代語形容詞の活用語尾

動詞活用語尾形態への仮託

一 はじめに

従来の古代語形容詞活用についての論は多くの蓄積があり、各活用形の成立や展開等、記述が多岐にわたる。それらに一貫した特徴は、形容詞という品詞の枠内で綿密に考察されたものであると言えよう。そのような特徴をふまえて、以下、論者は、動詞活用語尾との関連づけと形態類推という概念の導入によつて、古代語形容詞活用語尾についての考察に入りたい。そのような方法をとることは、古代語形容詞の活用を考える上での問題をより深化させると思ふのである。

本論では、動詞活用語尾群と比較した場合、形容詞活用語尾群が形態的な不整合性を示す(活用語尾形態がカ・サ・マ行にわたる)のはなぜか、形容詞という品詞における語法の一バリエーションと考えられるミ語法が、その外面的形態において動詞の姿をとっているのはなぜか、主としてこのような点を解明することを目的とする。

二 古代語における動詞活用語尾と形容詞活用語尾

二・一 タテ系列における形態類推とヨコ系列における形態類推⁽²⁾

竹内史郎

左には上代における動詞の活用表を示す(四段動詞はラ行、⁽³⁾その他はカ行のものに代表させ、語幹は示さない。ラ変・カ変・サ変・ナ変動詞は省略する⁽⁴⁾)。

①	活用形				②
	未然形	連用形	終止形	連体形	
四段	ラ	リ	ル	ル	已然形
下二段	ケ乙	ケ乙	ク	クル	ケ乙
上二段	キ乙	キ乙	ク	クル	キ乙
上一段	キ甲	キ甲	キ甲ル	キ甲ル	キ甲レ
					キ甲レ
					キ甲

ある活用語尾形態は、他の活用語尾形態と語幹を共有している(すなわち語彙的意味が等しい)ということ、個別独立に他の活用語尾形態と無関係ではありえない。例えば、ラ行四段動詞未然形ラは、連用形から命令形に至るまでの「リ・ル・レ」と形態的に近い関係にある(表の①参照)。これをタテ系列における形態類推と呼ぶ。活用語尾のタテ系列における形態類推は、ある語が文中でいろいろな機能を果たす際の、機能差を反映したものである。また、ある活用語尾形態は、文中で同じ機能を果たしているとい

うことで、機能的な共通性があるから、個別独立的ではなく、語彙の意味において異なる語の活用語尾形態と無関係ではありえない。

例えば、ラ行四段・下二段・上二段・上一段動詞の已然形における形態は、それぞれ「レ・クレ・クレ・キレ」とすべてレ形態をもつ（表の②参照）。これをヨコ系列における形態類推と呼ぶ。活用語尾のヨコ系列における形態類推は、語彙の意味が異なる語が文中で共通する機能を果たす際の、機能の同一性を反映したものであるから必然的である。そしてこの作用は品詞的な距たりを越えて作用する（後述）⁵⁾。

さて、そのような活用語尾形態に関わるタテとヨコの類推作用があることをふまえて、次に古代語形容詞の活用表をみてみる。

二・二 古代語形容詞の活用語尾における二タイプ

古代における形容詞の活用が通常次のように考えられていること、周知の通りである。なお、論者は、シク活用形容詞の語幹にシを含め、シク活用形容詞終止形は語幹に含まれるシが語尾を兼ねるという立場をとるので、ク活用・シク活用とわけて示すことはしない。そして、仮定表現形式「クハ」は「連用形十ハ」とみなす。ミ語法のミ語尾、サ語法のサ語尾は当然含まれるべきであるが、それらの活用形における位置付けは保留しておく⁶⁾。

形容詞	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ケ甲	ク	シ	キ甲	ケ甲	〇	

(ミ甲・サ)

カ行・サ行という二つの行に活用語尾がわたっており、そこにミ語法におけるミ語尾を加えると、マ行も加わって三つの行となり、動詞の活用表と比較すれば形容詞の活用表は形態的な整合度が低く、タテ系列の形態類推が部分的にはたらいっているにすぎない。

まず、形容詞活用語尾における本来的なものとそうでないものの区別をしておく。形容詞活用語尾にはク・シ・キ・ケ・ケレ・ミ・サとあって、それらの成立をすべて実証するのは最早動詞の活用の起源を明らかにすることと同様に困難である。諸説あって定説はないけれども⁸⁾、動詞活用語尾形態を念頭において、先行諸氏からの知見をもとにわかりやすいところを述べてみたい。

形容詞連用形語尾ク・連体形語尾キ甲については、装定形語尾として形容詞本来の語尾であり、ヨコ系列の形態類推のはたらきを受けることはなかったと思われる。なぜなら、動詞連用形がイ韻であるのに対し、形容詞連用形はウ韻であって、動詞連体形がイ韻であるのに対し、形容詞連体形はイ韻であるからである。動詞と形容詞は、連用形・連体形において形態的な一致をみることはない。

述定形語尾シも形容詞にとって本来的なものだろう。動詞終止形がウ韻であるのに対し、形容詞終止形はイ韻であるからである。ただし、形容詞述定形語尾シは、形容詞装定形語尾クやキとは、述定と装定という用法的差異から発生起源が異なるために、カ行語尾とサ行語尾というように差が生じたのかもしれない（冲森（一九八五）、加藤（一九九五）。述定形語尾シは（一）（二）における「サ」との共通点が認められる。

（一） 築紫舟いまだも来ねばあらかじめ荒ぶる君を見るが悲しき

（悲左）

（万 五五六）

- (2) 秋の花種々にあれど色ごとに見し明らむる今日の貴き(貴左) (万 四二五五)

このようなサ語法の例は万葉集に四八例みられ、一例を除き他すべて喚体句を構成している。サ行音であること、文末に用いられて「今、ここ」の表現を担当すること等の共通点がサとシにはある。

- (3) さ夜ふけて暁月に影見えて鳴くほととぎす聞けばなつかし(夏借) (万 四一八一)

- (4) あぢの住む須沙の入江の隠り沼のあな思づかし(伊伎豆加思) 見ず久にして (万 三三七四)

形容詞連用形ク・連体形キ・終止形シが動詞の連用形・連体形・終止形と形態的に共通することがないことは、双方の用言的性格からすると当然のことと言え、品詞性が語尾形態へ素朴に反映したものと見える。

以上にみたように、ク・キ・シ・サは形容詞が本来的に必要とした用法を具現化する活用語尾であるのに対して、言及しなかったケ・ケレ・ミにおいては、動詞活用語尾形態との関連から成立を説くべき形容詞活用語尾群であると思われる。以下それぞれの活用語尾についてみていくことにするが、いずれも考慮すべきはヨコ系列の形態類推のはたらきであろう。つまり、動詞の側の活用語尾形態から類推のはたらきによって、ケ・ケレ・ミという形容詞の活用語尾形態が作り出されたというふうに考えるのである。

三 ヨコ系列の形態類推による形容詞活用語尾の成立

三・一 ケの場合

山崎(一九七三)・川端(一九七七)は、形容詞活用語尾ケ甲の成

立を次のように考える。

- (5) $\text{E} + \text{aV} + \text{E}$ (母音に付された「1」を有する音節は甲類音を、「2」を有する音節は乙類音を表す)

すなわち、(5)は、連体形キ甲にaなる音形態が接したのち、「E」の母音連続が生じ、その母音連続を母音融合という形で解消した結果、形容詞活用語尾ケ甲が発生したことを意味する。

論者は、(5)に示した山崎(一九七三)説と川端(一九七七)説に従いたい。というのも、ケ甲の振る舞いを観察してみれば、(6)に示すように、助動詞ズ・ム・語尾ク(ク語法)に形容詞が上

接する際に用いられる、および、仮定条件を表すバ節・確定条件を表すパ節・ド節形成にかかわる、などの用法がみえ、ケ甲の振る舞いは、動詞未然形における用法が主であるからである。

- (6) 旅と言へば言にそ易きすくなくも妹に恋つつすべなけなくに(奈家奈久) (万 三七四三)

- (7) 玉梓の道に出で立ち別れなば見ぬ日さまねみ恋しけむかも(佐夫之家牟) (万 三九九六)

- (8) 我妹子に恋ふるに我はたまきはる短き命も惜しけく(乎之家久) もなし (万 三三四四)

- (9) 恋しけば(恋之家婆) 形見にせむと我が屋戸に植ゑし藤波今咲きにけり (万 一四七二)

- (10) あしひきの山きへなりて玉梓の道の遠けば(等保家婆) 間使ひも遣るよしもなみ思ほしき言も通はず (万 三九六九)

- (11) あをによし奈良の大路は行き良けど(余家杼) この山道は行き悪しかりけり (万 三七二八)

形容詞活用語尾ケ甲は先の一般的な形容詞活用表にも示したよう

に、未然形と已然形とに配置されるのが常であるが、論者も川端氏と同様に、ケ甲は活用表において未然形だけに限られるとみたい。

ただ、川端氏は右に述べたように振る舞うケ甲を根拠として、その情態言的性格を説明する方向へと論を進ませるのに対し、論者は、

このようなケ甲の振る舞いを根拠として、ケ甲はヨコ系列の形態類推を受け、動詞活用語尾形態へ仮託したと捉えたい。つまり、四段動詞未然形に存在していた形態aが、ヨコ系列の形態類推によって、

形容詞の本来的な連体形キ甲に付加されたと考ええる。そうすると、未然形ケ甲が(10)(11)のように確定条件を表すバ節・ド節の形成に関わることが問題になるが、ここで形態と機能の関係におけるねじれという現象について考慮しておく。

上代において、係助詞コソの結びとなる形容詞述語が已然形にならず連体形となることは周知の事実である。

(12) 衣こそ(虚曾)二重も良き(豫青)さ夜床を並べむ君はかしきろかも (日本書紀歌謡 四七)

(13) 海の底おきを深めて生ふる藻のもとも今こそ(社)恋はすべ無き(為便無寸) (万 二七八一)

(12)(13)にみられる事實は、形態と機能の関係におけるねじれであろう。本来コソの結びに対応すべき形容詞已然形形態の不在による連体形の代用であると考えられる。ケ甲が已然形であるなら、「コソケ」という対応があつてもよいはずであるが、そうはならなかった。これと同様に、確定条件節の形成にケ甲が関わることも解釈できるのではないか。すなわち、本来確定条件節の形成に対応すべき形容詞已然形の不在による未然形の代用なのである。已然形ケレが成立する以前、形容詞已然形は空白であつて、その空白を未然形

ケ甲や連体形キ甲が満たしていた。したがって、確定条件節の形成にケ甲が関わることは、コソの結びとなる形容詞述語が連体形となることと同様に、本来はたらくべき已然形が未発達だったことによる、形態と機能の関係におけるねじれ現象なのだと解釈できよう。

山崎・川端両氏の説くように、ケ甲の発生が「E + a V ko」であるとする、四段動詞未然形に存在していた形態aが、ヨコ系列の形態類推によって、形容詞の本来的な連体形キ甲に付加されたのだと考えられる。したがって、四段動詞のズやムやク語尾(ク語法)や仮定条件節形成における接続助詞バへの上接が、語末をaという形態に変化させることで可能となるように、aを含むケ甲は、ズやムやク語尾や仮定条件節形成における接続助詞バに上接することが可能だったのだと思う。

三・二 ケレの場合

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
カラ	カリ	○	カル	○	カレ

形容詞カリ活用は、動詞に匹敵するほどのタテ系列の形態類推がはたらいっているといえる。¹¹⁾これらがアリを内在しているため、ラ変型活用で形態が整えられているのは当然であるけれども、注目したいのは已然形に空白があることである。

次の例が示すように、カリ活用已然形成立の素地は、他のカリ活用形の成立のそれと等しかったと思われる。¹²⁾

(14) すべもなく苦しくあれば(苦志久阿礼婆) 出で走り去ななと思へど此らに障りぬ (万 八九九)

ねど

(古今 一九三)

パ節・ド(モ) 節形成に関わる用法は上代で確認できるのに対し、係助詞コソの結びに対応する用法は、平安中期になって初出が確認される。したがって、已然形ケレの展開は、比例四項式で表せば次のようになる。(①は確定条件形成の用法における形態を、②はコソの結びの用法における形態を表す)。

(23) ①レ・クレ・キレ…②レ・クレ・キレ ①ケレ…②x

x Ⅱ ケレ

形容詞已然形ケレは、確定条件形成の用法に成立し、コソの結び用法へ展開するという歴史的事情をまず認めたい。このように確定条件節形成用法がケレ成立の場所であったとすると、既存の「未然形ケ+バ・ド」を利用したということになる。

三・三 ミの場合

三・三・一 i 母音の獲得

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段	ラ	リ	ル	レ	レ	レ
下二段	ケ乙	ケ乙	ク	クル	クレ	ケ乙
上二段	キ乙	キ乙	ク	クル	クレ	キ乙
上一段	キ甲	キ甲	キ甲ル	キ甲ル	キ甲レ	キ甲
形容詞		ミ甲				

ミ語法は接続助詞を用いない活用語尾による接続法だから、次の(24) (25) に示すような動詞連用形による接続法と近い関係にある。

(24) …ますらをの男さびすと剣大刀腰に取り佩き(刀利波根)

さつ弓を手握り持ちて… (万 八〇四)

(25) 朝なれば妹が手にまぐ鏡なす三津の浜辺に大舟にま梶しじ貫き(奴伎) 韓国に渡り行かむと… (万 三六二七)

連用中止接続という機能の共通性のもとに、形容詞が動詞の側から類推的に i 母音を獲得するようになったのではないか。ただ、獲得の出所は、上一段動詞の勢力の弱さからして、四段動詞連用形群であるかと思われる。接続の方法は、大きく分けて連用形接続のような無標のものと、バ・ド・ヲ等の接続助詞を用いる有標のものとがあると思われるが、上代語において動詞連用形接続が頻用されること言うまでもない。そして、原理的に言って無標の接続と有標の接続とは無標の接続が歴史的に先行していただろうことも想像に難くない。動詞連用形接続における、勢力が強く接続形態のタイプとして先行的であるという特徴は、形態類推を与える側がもっている当然の特徴であると思う。

三・三・二 m 子音の選択

さて、形容詞が動詞連用形形態からヨコ系列の類推によって i 母音を獲得するとしても、m という子音が選択されることをここで述べなければならぬ。まず、接尾辞における子音の選択について言及しておく。

接尾辞の形態において r や s や f や k の子音は多用される。文法的意味を担うもの(例えば動詞化接尾辞 r「自動を表す指標となる」)や s(他動を表す指標となる)や f(継続を表す指標となる)以外では、接尾辞生成の際どの形態が選ばれるかに関して、より勢力の強い形態が選ばれるように思われる。通常、語幹部分で語彙的意味

の弁別が満たされていることから、語尾形態においては頻用度が高く、有用性のある子音が選ばれよう。

ミ語法においてmという子音形態が選ばれる理由を考える際、論者は次の点に注意したい(次の点は木田(一九八八)における表2〔本論注3参照〕・川端(一九九七)を参照した結果導いたもの)。

● 動詞接尾辞・名詞接尾辞の場合における「m・」(「」は母音を表す)をみてみると、頻用度における一般性が認められる。また、動詞接尾辞としての用法、名詞接尾辞としての用法、あるいは動作や外的現象における複数性を表す中止法的用法(男じもの負ひみ抱きみ(万 四八一)等というように、接尾辞「m・」には、用法の点における有用性も認められる。

つまり、接尾辞におけるm子音の存在は決して小さいものではなく、「頻用度の一般性」「用法の点での有用性」という二つの特徴が認められる。

さらに語尾形態における示差性を考慮すると、形態音韻論的にs・kは選択できない。なぜなら、形容詞終止形「―シ」・連体形「―キ」と同形になるからである。fも固有な文法的意味を担う形態であるため忌避された可能性がある。では最も語尾形態として一般的なrはなぜ選ばれなかったのか。思うに形容詞が動詞派生を行う際に「形容詞語幹+r・」という語形態が用いられるため(アカル・タカル・ヒロル・モル)、それらとの形態示差を維持したのではなかったか。

以上のことを考慮すれば、必ずしも、ミ語法においてmの形態が選ばれたことは理由のないことではない。rやsやfやkが選択不可能となれば順序としてmあたりが候補として考えられるのである。⁽¹⁵⁾

ここまでの記述は、ヨコ系列の形態類推のはたらかにより、形容詞が語尾を作り出す際に動詞活用語尾形態へ仮託することがあるというものであった。このように見てくれば、品詞論的に形容詞の語法でありながら外面の姿は動詞であるという一見不可解に見えるミ語法も、形容詞活用語尾における数ある動詞活用語尾形態への仮託現象の一例と考えることによって、自然に理解ができるのではないだろうか。ただ依然としてミ語法に伴うヲの問題は残されたままである。後日に期したい。

四 動詞活用語尾形態へ仮託する理由と形容詞活用の特徴

古代語形容詞活用語尾には、形容詞活用語尾でありながら動詞活用語尾形態に仮託するという現象が、ケ・ケレ・ミの場合に観察された。そうしたことが観察できる理由は、形容詞における助動詞接続の用法や条件節形成という用法の成立・一般化が動詞におけるそうした用法の成立・一般化に比して歴史的に遅れをとっていたから、および形容詞という品詞論的範疇においてケ・ケレ・ミはク・シ・キ・サに比して副次的なものであったからに他ならない。しかしながら、より着目されるべきは、ケ・ケレ・ミのいずれもが条件節形成に関わるといふ点である。すなわち、条件節末述語という構文的な場所としての特性が反映しているという点である。

平安時代に入りカリ活用が整備されると、形容詞における助動詞接続・仮定条件節形成の用法は、主にカリ活用形式によって担われるようになる。その結果、動詞活用語尾形態へ仮託した形容詞活用語尾の中、未然形は訓点語の世界を別にすれば文献上から姿を消

すことになる。ところが、ケレは既述のようにカリ活用已然形カレが成立することを阻止した。このことをふまえると、条件節の中でも、順接確定条件という意味領域においては、節末の形容詞述語の形態を動詞活用語尾形態へ仮託させる作用（ヨコ系列の形態類推のはたらし）が特に強いと言えよう。ラ行四段・下二段・上二段・上一段動詞のみならず、形容詞をも含めた已然形のレ形態での統一は、中山（一九八四）における「強式」といえるが、「強式」といえる程の形態的な同化作用の強さはとりわけ注意される。このあたりの事情は、同じく順接確定条件節（原因理由節）を形成するミ語法においても同様であろうと思われる。

また、母音の交替や靡・靡伏の付接という特徴をもつ動詞活用とは決定的に異なる一面が形容詞活用には見受けられる。キ・シ・ミというように結果としてイ韻のものを複数有する形容詞活用語尾は、k・s・mという子音の形態差によって機能差の明示を果たしていた。このことは、形容詞活用の顕著な特徴といえ、同時に形容詞活用語尾が三行にわたることの所以でもあろう。

五 ま と め

本論では次のことを述べた。確認しておく。

- 古代語形容詞語尾には本来的なク・シ・キ・サと、ヨコ系列の形態類推によって、動詞活用語尾形態に仮託したケ・ケレ・ミとの二タイプがある。
- ケの場合は四段動詞未然形が有していたaの形態を、ケレの場合はラ行四段・下二段・上二段・上一段動詞已然形が有していたレの形態を、ミ語法の場合は四段動詞連用形が有していたi

の形態をそれぞれ類推的に取り入れたことになる。

品詞的あり方と形態が一致しないミ語法は、一見非常に不可解な語法であるように見受けられるが、形容詞活用語尾が動詞活用語尾形態に仮託するという数ある現象の一つであると認識すれば、自然に理解ができる。

形容詞活用語尾において動詞活用語尾形態に仮託するという現象（ケ・ケレ・ミ）が起こる理由は、条件節（とりわけ順接確定条件節）末述語という構文的な場所としての特性が反映しているという点に求められる。

キ・シ・ミというように結果としてイ韻のものを複数有する形容詞活用語尾は、k・s・mという子音の形態差によって機能差の明示を果たしていた。このことは、動詞活用に対する形容詞活用の顕著な特徴といえ、形容詞活用語尾が三行にわたることの所以である。

注

(1) 上代ミ語法がその外面的姿に反して形容詞の語法における一パリアントであることについては、竹内（二〇〇二）を参照。

(2) 二一のアイデアは、中山（一九八四）、屋名池（一九九二）、佐野（一九九九）等の論考に示唆を受けた。

(3) 四段動詞をラ行のものに代表させることについては、以下の理由による。木田（一九八八）には、上代語動詞を語尾・活用別に分類した表がある（二頁、表2）。そこから、四段・下二段・上二段・上一段動詞に限り取り出して、語尾「リ」の項・その他¹の項を除いて次に示す（数値は異なり語数を、空欄はゼロを表す）。

次頁の表によれば、ル語尾かつ四段活用ものが圧倒的多数を占めており、四段活用語尾ルは動詞語尾体系の中で無標であるといえよう。論者はこの四段活用語尾ルの無標性を重視したい。また、後述の三・三・二における議論に関わることであるが、勢力の強い語尾群としてル・フ・

計	上一	上二	下二	四段	
518	20	5	81	412	ル
321		7	77	244	フ
283		5	75	208	ク
221			32	189	ス
205		12	62	131	ム
75		35	13	27	ブ
78		3	19	56	ツ
57		6	18	33	グ
40		5	35		ユ
20			20		ヌ
21		6	15		ヅ
7		2	9		ウ
1			1		ズ

ク・ス・ムがあることに注意されたい。

(4) 以下、ある形態の特徴を共有するより優性な一群が、ある形態の特徴を共有する劣性な一群に対して、形態的に類推同化を与えるという問題を扱う。そのため、特殊例外的な変格系動詞群は本論の考察の対象から除いておくことにする。

(5) 四段動詞と二段動詞との歴史的関係については、四段動詞を基本とみなす考えが圧倒的である。そうした状況で、唯一、二段動詞古形説を唱えるのが木田(一九八八)である。四段動詞・二段動詞のいずれが古形かという問題は、それが文献以前を再構するものであるために、現状では決定的なことが明らかになっていない。また、各活用形の成立過程も右の問題と深く関わっている。本論では、動詞内部におけるタテ系列の形態類推・ヨコ系列の形態類推いずれにおいても基本形式から派生形式へという方向性、すなわち過程を問題としない。そうした処置は「類推」という用語の使用において適切とは言えないけれども、とりあえず、今結果からみる限りで、タテ系列・ヨコ系列双方に形態類推が作用していることのみを考慮したい。

(6) 「見るが悲しさ」等の形容詞語幹が接尾辞サを下接した一種の喚体句を構成する語法。橋本(一九七八)により「サ語法」と命名された。

(7) 形容詞の活用表にミを加えることは、安藤(一九三七)によって提案された。また、サを加えることについては、木田(二〇〇一)の指摘が早い。

(8) 管見に入ったものをあげておく。鶴(一九六三)、桜井(一九六五)、岡村(一九六八)、嶋(一九七〇)、今西(一九七三)、春日(一九七三)、

山口佳紀(一九七三)、川端(一九七七)、沖森(一九八五)、加藤(一九九五)、馬淵(一九九八)、木田(二〇〇一)。

(9) 喚体句を構成しない一例をあげておく。

・天にます月説をとこ路はせむ今夜の長さ(長者) 五百夜継ぎこそ

(万 九八五)

(10) 但し、「シ」の用法には、アクチュアルな「今・こ」の表現だけでなく、次のようなポテンシャルな用法もある。

・玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻きかたし

(難石) (万 七二九)

(11) 形容詞カリ活用形成に、タテ系列の形態類推がはたしていることの直接の証拠は、屋名池(一九九二)、佐野(一九九八)等が指摘するところである。「クアラベカラ」という音変化をへて成立したカリ活用未然形は母音脱落条件からすると「クラ」となるべきだが、母音脱落条件に反してまで、連用形カリや連体形カルや命令形カレとの形態類似性を大事にしたのである。

(12) なお、カリ活用終止形は成立における素地すら無かったと思われるが、次の例は一見カリ活用終止形の祖形の例であるかのようである。

うちひさす都の人に告げまはくは見し日のごとくあり(其等久安里)と告げこそ

(万 四四七三)

けれども、「あり」が意味的に「生きている／生きながらえている」と考えられることから、それが本動詞として機能している例とみたい。ただし、オホカリ(多)に限り、カリ活用終止形の例が平安期和文で容易に見いだすことができる。

(13) 論者の見解と同様に、岡村(一九六八・川端(一九七七・沖森(一九八五)等でも、形容詞已然形ケレは、ケ甲を前提として動詞の塵伏からの類推によって成立したのではないかという見解が示されてある。それらに対する本論の考察は、岡村(一九六八)以来仮説として提出されていた已然形ケレの成立を、形容詞活用語尾における動詞活用語尾形態への仮託現象の一例と捉えることで、より確実に主張することを目指したものと言える。また、鶴(一九六三)によれば、上代の「ケレ」は平安時代の「ケレ」とは語形は同じでもそれらに対する語意識は相違したという認識のもと、前者は「ケレ」に存在を表す助動詞が下接した古代日本語の遺影であって、前者の「ケレ」におけるレは接尾辞化していても形容詞已然形とは意識されいなかったという。しかしながら、アスペクトの意味に関わる助動詞リに形容詞が接続するとい

うこと、同じ形態「ケレ」を上代と平安時代とで意味の異なるものと認めること、そのような点に鶴氏の論には難があるように思われる。

(14) 橋本(一九六二)、山口堯一(一九八〇)等によって、動詞連用形接続による表現とミ語法による表現は類似関係にあると指摘されており、山口堯一(一九八〇)は、継起性・因由性・並列性という三点を共通する要素として取り出すことができるとしている。けれども、ミ語法の表現は因由性を表すものに圧倒的に傾くという点、異なる要素であるとも述べている。

(15) ミ語法の述語形式「形容詞語幹+ミ」におけるミの由来の説明に、マ行四段動詞(カナシム・ヲシム等の形容詞から派生したと思われる動詞群)がその起源であったとする説がある(富士谷成章「あゆひ抄」・山田孝雄(一九二二)・山口佳紀(一九八四))。その説に関わるミ語法とマ行四段動詞群との歴史的解釈については機会を改めて詳しく論じたいと思っている。

使用文献

古事記歌謡・日本書紀歌謡：岩波日本古典文学大系「古代歌謡集」

万葉集：『万葉集 本文篇』『万葉集 訳文篇』(福書房)

日本紀竟宴和歌：『本妙寺本 日本紀竟宴和歌 本文・索引・研究』(翰林書房)

古今集：岩波新日本古典文学大系

字津保物語：『字津保物語 本文と索引』本文編(笠間書院)

参考文献

安藤正次(一九三七)「高み・速み」などのみについて、『国語学論考』Ⅲ

雄山閣出版 一九七五年 所収、四六―五四頁

今西浩子(一九七三)「形容詞の活用形成立について―連用・終止・連体の場合―」『紀要(昭和学院短期大学)』第一〇号、三一―四一頁

岡村昌夫(一九六八)「第五章三節 形容詞の成立」馬淵和夫著「上代のことば」至文堂、二三〇―二四五頁

沖森卓也(一九八五)「形容詞の成立」『日本語学』第四卷三三、三六―四六頁

春日和男(一九七三)「形容詞の発生」『品詞別 日本文法講座4 形容詞・形容動詞 明治書院、八一―七頁

加藤浩司(一九九五)「古代語形容詞ク活・シク活考」『名古屋大学 国語国

文学』七六号、九五―一七頁

川端善明(一九七七)「形容詞の活用」『国語国文』四六卷二号「活用の研究Ⅱ」清文堂出版 一九九七年 所収、二五九―四一三頁

〇頁 (一九九七)「第一章 体の活用」『活用の研究Ⅱ』清文堂出版、八一―九〇頁

木田義章(一九八八)「活用形式の成立と上代特殊仮名遣」『国語国文』五七卷一、一―二四頁

(二〇〇一)「形容詞をめぐる」『語源研究』第四〇号、一一―一四頁 (第四〇回 日本語源研究会 発表用資料)

桜井茂治(一九六五)「形容詞の活用形の成立について」『國學院雑誌』第六六卷八号、三一―五一頁

佐野 宏(一九九九)「母音脱落現象と語構成」『国語学』一九九集、二八―四一頁

鶴 稔(一九七〇)「形容詞―特にそのケ語尾の性格―」『月刊 文法』第三卷第一号、四二―四九頁

竹内史郎(二〇〇二)「上代ミ語法の形容詞性」『国語学会 二〇〇二年度春季大会要旨集』、五九―六六頁

鶴 久(一九六三)「形容詞の已然形」『国語学』五四集、一〇―一九頁

中山昌久(一九八四)「3 動詞の活用」『研究資料 日本文法』②「用言編」(一)動詞 明治書院、三八―七九頁

橋本四郎(一九六二)「ミの形における問題」『萬葉』四二号 一一―一五頁 (一九七八)「ク語法とその周辺」『論集 日本文学・日本語Ⅰ 上代』(橋本四郎論文集 国語学編)角川書店 一九八六年 所収、一七六―一九四頁

富士谷成章(二七七八)「あゆひ抄」(中田祝夫・竹岡正夫「あゆひ抄新注」風間書房)

馬淵和夫(一九九九)「四 日本語の形容詞・形容動詞」『古代日本語の姿』武蔵野書院、三一―三三頁

屋名池誠(一九九二)「母音脱落―日本語上代中央方言資料による形態音韻論的分析―」『女子大文学』第四三三、一―四一頁

山口堯二(一九八〇)「用言連用形による接続とミ語法」『大阪大学教養部研究集録(人文・社会科学)』第二八集、三九五―一頁

山口佳紀(一九七三)「形容詞活用の成立」『国語と國文学』五〇巻九号(「古代日本語文法成立の研究」有精堂 一九八五年 所収、二七―二九九頁

- (一九八四)『語法の成立』、論集 上代文学、一三冊 笠間書院
- (『古代日本語文法成立の研究』有精堂 一九八五年 所収)、一七三—
九六頁
- 山崎 馨 (一九七三)「形容詞の発達」、『品詞別 日本文法講座 4』形容詞・
形容動詞 明治書院、五九—九四頁
- 山田孝雄 (一九二一)『奈良朝文法史』、宝文館
- 本学大学院博士後期課程 ——